

講演「都市災害：阪神・淡路大震災からの教訓」（概要メモ）

講師：稲谷 利輝 人と防災未来センター語り部

「都市災害：阪神・淡路大震災からの教訓」をテーマに、講演が行われました。講演内容は、1. 被災体験、2. 直後の救助活動、3. 震災からの教訓となっています。以下に、その概要を紹介します。

1. 被災体験

阪神・淡路の地震は平成7年1月17日午前5時46分に起こりました、このとき私は、初期微動で「地震だ」と思って目を覚ました。はじめから強く揺れたので立ち上がり、そのまま布団の中にいたのが生き延びることが出来た理由の一つだ。揺れに続いて、ドカーンと突き上げられ、投げ落とされるものすごい揺れが続き、ゴーと言う音、どどどと地面が揺れる音、メリメリと家がきしむ音が混ざり、表現の使えない状況が続いた。10分間も続いたと思ったが、記録では10数秒間に過ぎなかった。家屋が倒壊して、私はその下敷きになってしまったが、幸いにも自力で脱出することができ助かりましたとの説明がありました。

2. 直後の救助活動

地震直後の町内は無残な姿に変わり、大人も子供も呆然とし、取り乱したり喚いたりする者もなく、ただ、呆然としていた。しばらくして、近所の者で出て来ていないものもいることが分かり、「家ごとに誰がいないか報告してください」と言ったことで、出てこられない者がどの家の誰かが分かったので、集まった人達を班分けにして、埋まっている人の救出活動を始めた。埋まった人の多くは家具、特にタンスの下敷きになっていたり、閉じ込められていたりしていたので中からは出られない状況であった。壊した瓦礫などを別な場所に移すために女性も子供も加わり、文字通り町内上げての「協働」だった。このため、私たちの町内では怪我人はいましたが、亡くなった者はいなかったとの説明がありました。

3. 震災からの教訓

平時の火災や事故はポイント・点で起きるが、地震の災害被害は面で起きる。救助隊の活動だけでは限界がある。初期の救出活動が生死を分ける。近隣の者達の協力による救助活動が是非とも必要だと思っている。阪神淡路大震災では淡路島の方が神戸より生存率が高いのは消防団の方々や、近所の人々が助けたからだ。このさいたま市が神戸以上に人とつながりがあるなら幸いで、それを大切に育てて欲しい。神戸はもともと見知らぬ移住者が集まった町で、現在は人間関係の希薄な都会になってしまっている。神戸を反面教師にして、お互いに助け合う連帯感を大切に培って欲しい。「自助」「共助」「公助」が言われているが、共助は「協助」が大切で、日頃からの顔と顔をあわせる近所付き合い、住民活動が大切だと思う。地球の表面で、生きている我々には生きた地球の営みが、災害となって、襲われることは避けられない。それをふせぐ「防災」は被害を限りなく、ゼロの近づけることに尽きる。防災のシステムは整備

されてもそれを動かすのは人。災害に備えて、次の世代に引き継いで行くことが大切との説明がありました。